



東日本大震災から5年—今、被災地の声を聴く

概要

九州大学大学院地球社会統合科学府では、2016年3月6日（日）に、講演会・シンポジウム「東日本大震災から5年—今、被災地の声を聴く」を開催します。実際に被災に遭われた方、被災地・被災者の支援をされた方を福岡にお招きし、この5年間をふり返ってご講演をいただきます。その声に耳を傾けることを通して、被災地の現状に関する認識を新たにするとともに、日本列島のどこでも起こりうる将来の災害に備えて東日本大震災の経験から何を学ぶべきか、市民の皆さまとともに考えます。

背景

平成23年に発生した東日本大震災から、この3月11日で5年目を迎えます。震災の犠牲者は2万人を超え、関連死も3,400人を数え、いまでもその数は増え続けています。長引く復興事業や原発事故のため、多くの方がもともと暮らしていた土地に住み続けることができなくなり、コミュニティの絆は弱体化し、数多くの孤独死も報告されています。たしかに復興事業は進んでいます。この5年間でおおよそ26兆円が費やされ、高台移転など「防災集団移転」は333地区、街を造り直す「土地区画整理事業」は50地区に及ぶなど、その事業は大規模に進められてきました。しかし、今でも約18万人もの人びとが避難生活を強いられ、そのうちの6万2千人余がプレハブの仮設住宅での生活を余儀なくされています。

九州大学大学院比較社会文化研究院（大学院教育としては、比較社会文化学府（平成26年度から募集停止）および地球社会統合科学府（平成26年度より設置）を担当）は、平成23年、24年、25年の3年にわたって、計11回の研究会と2回の公開シンポジウムを開催し、震災に関わる諸課題の分析と情報発信に取り組んできました。震災後5年を迎える今年、これまでの経験をふまえて、あらためて実際に震災を経験された被災者および支援者をお招きしてこの5年間を振り返り、今後の震災復興や社会のあり方を考え直す機会を持ちます。

内容

東日本大震災については数多くのことが語られてきました。専門家による分析や提言も多数あります。しかし、それらの多くは、被災者の生活そのものからかけ離れたものだという声も絶えません。大規模な堤防建設や漁業基地の集約など、多くの復興事業がなされてきましたが、それらの事業が被災者の声をどの程度聴いてなされたものだったのか、反省を求める声も強いのです。そこで、今回の講演会・シンポジウムでは、それぞれ異なった立場において被災の現場に経験された3名の方にご講演をいただき、震災後5年間の歩みを振り返りつつ、今後に向けて震災から学ぶべき点を明らかにしていきます。

【日時】2016年3月6日（日）17:15～20:15（開場 16:45）

【会場】九州大学西新プラザ大会議室

（福岡市早良区西新2-16-23 Tel:092-831-8104）

※入場無料

【申込方法】「地球社会」で検索し、専用フォームからお申し込みください。

【プログラム】

○17:15～ 主催者挨拶

○17:30～17:50 講演1

「福岡市による東日本大震災被災地復興支援の取り組み」

鹿嶋秀夫（福岡市水道局浄水部設備課）

- 17:50～18:30 講演2
「東日本大震災・被災児童の心のケア」
宗貞 研（川崎幸病院）
- 18:30～18:45 休憩
- 18:45～19:45 講演3
「東日本大震災から学んだこと」
丹野祐子（宮城県名取市閑上中学校遺族会）
- 19:45～20:15 パネルディスカッション
閉会挨拶

【講演者紹介】

◇鹿嶋秀夫（福岡市水道局浄水部設備課）

1956年福岡県生まれ。1976年久留米高専卒業、民間を経て1979年技術職員として福岡市入庁、水道局配属。主に浄水技術、排水流量調整、プラント設計部門に従事。2005年福岡県西方沖地震で被害の大きかった玄海島での排水管復旧計画に従事する。東日本大震災では発生直後から福岡市水道局災害派遣隊が結成され、第6次隊長として、宮城県山元町で破損排水管の復旧活動を行う。

◇宗貞 研（川崎幸病院）

看護師、心理社会的ケアファシリテーター。公益社団法人日本国際民間協会の専門家として東日本大震災発生直後の宮城県名取市、岩手県陸前高田市に入り、緊急時災害医療支援として、避難所巡回診療や被災診療所の24時間診療に従事。その後三年間を、被災した子ども達や大人たちへの心理社会的ケアに取り組む。また、パレスチナ・ガザ地区の紛争地に暮らす子ども達やヨルダン・ザアタリのシリア難民キャンプに暮らす子ども達へ、同ケアを行う現地スタッフの指導にも携わる。

◇丹野祐子（宮城県名取市閑上中学校遺族会）

宮城県名取市閑上（ゆりあげ）中学校遺族会代表。津波で750名以上の方が犠牲となった閑上地区。その中でも被害の一番大きかった閑上2丁目の出身で、自宅も完全に流出。震災により、当時中学1年生だった息子（公太くん）と義理の父母を亡くす。2011年11月に閑上中学校遺族会を立ち上げ、亡くなった14名の生徒の名を刻んだ慰霊碑を建立。語り部として震災やいのちの大切さを伝える活動を行っている。

■効果

地震のみならず気候変動による異常気象など、21世紀の地球社会は大災害に向き合っていることを余儀なくされています。日本だけをとってみても南海トラフ地震や首都直下型地震などが予想されています。予想されている災害に対してどのように向き合っていくべきか、そのヒントを東日本大震災の経験から学ぶことが求められています。今回は、震災後5年という事態を客観的に振り返ることのできる時点から、市民、市職員、医療従事者という多様な立場からの震災の振り返りを通して、次代に伝えるべき教訓を導き出し、市民とともに共有することが期待できます。

■今後の展開

大学院地球社会統合科学府は現代社会の喫緊の問題に応え、未来社会の構築に貢献する人材を養成することを目指しています。今後も、国内外で活躍する研究者や知識人を招聘して講演会やシンポジウムを開催し、より公正で平和な世界の構築に貢献する教育研究に努めていきます。

【お問い合わせ】

大学院比較社会文化研究院
教授 鏑木 政彦（かぶらぎ まさひこ）
電話：092-802-5623
FAX：092-802-5623
Mail：kaburagi@scs.kyushu-u.ac.jp